

五、南京安全区

どのような戦争の歴史においても、常に、虐げられた人々の希望の光になるような、ごくわずかだが特別な人たちが現れる。アメリカ合衆国ではクエーカー教徒が自分たちの奴隷を解放し、「地下鉄道」の設立を援助した。第二次世界大戦時のヨーロッパでは、ナチ党員のオスカー・シンドラーが自分の財産を投じて一、二〇〇人のユダヤ人をアウシュビッツのガス室から救い出し、スウェーデンの外交官ラウル・ワレンバーグは一〇万人以上のユダヤ人に虚偽のパスポートを与えて、彼らを救った。友人らと共に、アムステルダム屋根裏部屋で若いアンネ・フランクと彼女の家族をかくまったオーストリアの女性ミープ・ヒースも忘れることができない。

暗い時代はほとんどの人々を麻痺させるが、何人かのほんの一握りの人たちがあらゆる警告を無視して、平時には彼ら自身でも想像することもできないようなことを行う。その理由を我々の多くは窺い知ることができないのだが。

南京大虐殺の恐怖の中に明るい面を見出すことは難しいが、求め得るとすれば、アメリカ人とヨーロッパ人の小さなチームの行為が光彩を放っていたことは確かなことである。彼らは自らを危険にさらして

日本の侵略者たちに抗い、ほとんど確実だった根絶の淵から数十万人の中国人難民を救った。この勇氣ある男たちと女たちは南京安全区国際委員会を設立した。これはその物語である。

南京市内に安全区を設立しようという決定は、上海の陥落とほぼ同時に持ち上がった。一九三七年の一月、フランスの宣教師ジャキノ・ド・ベサジュ神父は、侵略してきた日本兵によつて家を破壊された四五万人の中国人を收容するために、上海市内に中立地帯を設定した。長老派教会の牧師W・プラマー・ミルズがベサジュの計画を知つたとき、彼は友人たちに同じような区域を南京にも設立すべきだと示唆した。ミルズと他の二〇人余りの人々（ほとんどはアメリカ人だが、ドイツ人、オランダ人、ロシア人、そして中国人もいた）は、最終的に市の中央部よりやや西側の地域を安全区に指定した。この区域には、南京大学（当時は金陵大学、以下同一訳者）、金陵女子文理学院、アメリカ大使館のほかに多数の中国政府の庁舎が置かれていた。安全区を設立するとき、委員会は日本軍と中国軍の戦闘に巻き込まれる非戦闘員に避難場所を提供しようとしていた。外国人たちの意図は、市が安全に日本軍に掌握されてから数日間から数週間、区域を封鎖しようというものだった。

当初、この考えは一般的には受け入れられなかった。第一に、日本軍はそれを認めることをあからさまに拒絶した。そして、敵軍が接近してくる中で、安全区委員会は友人や家族からだけでなく、中国人、日本人さらには欧米の政府筋からも、直ちに計画を放棄して生命を護るために避難してほしいという緊急の訴えを聞かされた。一二月の始めにはアメリカ大使館の職員が委員区の指導者に向かい、外交官、ジャーナリスト、あるいは欧米人や中国人の避難民が乗り込んで、南京の上流に向かって出帆しようとしているアメリカ砲艦「パネー」号に乗船すべきだと説得した。しかし、安全区の指導者たちは丁重に申し

出を退け、パネー号の外交官たちは最終警告を言い渡した後、残留する外国人たちの運命を彼ら自身の責任に委ね、一九三七年一月九日に出航して去っていった。

興味深いことに、のちにパネー号は日本軍の飛行機に爆撃され、銃撃された。一月二二日の午後、日本軍の飛行機は無警告のままパネー号を撃沈し、二人を殺し、多数を負傷させ、川岸の葦の茂みに隠れていた生存者を皆殺しにするかのように、何度もその上空を旋回した。襲撃の理由は明らかではない。あとになって、日本人は白熱する戦闘で飛行士が冷静な判断力を失い、また霧や煙のためにパネー号のアメリカ国旗が見えなかったのだと主張したが、その後この主張は完全な虚偽であることが立証された（当日は晴天で雲がなかっただけでなく、日本の飛行士はパネー号を爆撃すべしという明示的な命令を受け取っていて、飛行士はその命令に対して激しく抗議し、議論した後、不承不承それを遂行したのである）。今日、爆撃はアメリカ人がどのように反応するかを確かめるためのテストだったという説があり、また日本の軍上層部の政争の結果だったという説もある。しかし、襲撃の背後にどのような理由があったにせよ、南京市は残っている外国人にとつてパネー号よりも安全な場所になったのである。

南京安全区に入った最初の難民は、空爆によつて家を失った人たちや、日本軍の接近に直面して南京近郊の家を放棄した人たちだった。やがて、これら最初の避難民たちでキャンプ地は飽和状態になり、多くの人は追加のキャンプ地が設定されるまで何日間も立ったまま眠ることもできなかつたといわれた。市が陥落すると、安全区に寝起きする人間は数千人どころか、数十万人になった。その後の六週間、委員会はこれらの難民が生き残るための必需品、食料、避難場所、そして医療サービスを用意する方策を見つけないければならなかつた。また、委員会のメンバーたちは、避難民たちを物理的な危害から保護

しなければならなかった。そのためには、多くの場合、日本軍がなんらかの脅威的な行動を行うことを阻止するための一時的な介入が必要だった。そして彼らは、これらすべての活動を通じて、誰に頼まれたいわけでもないのに、日本人の暴虐を記録し、世界に向けて訴えた。そうすることにより、彼らは自分たちが目撃したものを後世に伝える記録としての証拠を残したのである。

五万人の日本兵が市を踏みにじついているときに、二〇人余りの外国人が行うことができたことを思い起こしてみると、奇跡的だと思わざるを得ない。この男たちあるいは女たちの職業は、宣教師、医師、教授あるいは管理職で、歴戦の軍士官ではなかったということも忘れてはならない。彼らの普段の生活は、奥深く保護されたのんびりとしたものだった。「私たちは裕福ではありませんでした」。ある女性はこの時期について語った。「しかし、僅かな外貨でも中国ではとても役にたちました」。ほとんどは豪邸の奥に住み、大勢の召使によるチームに囲まれていた。

奇妙なことだが、その一〇年前に南京で起きたある事件のために、多くの人は日本人ではなく中国人との間に揉め事が起こることを心配していた。一九二七年に南京にいた人は、国民革命軍が南京に侵入したとき、中国軍が無分別に外国人を殺し、スコニー・ヒルの頂上の家にいたアメリカ領事夫妻をも含む外国人の一团を包囲したことを思い出した（「彼らは私たちを殺すのだろうか」。ある女性がその恐怖のときについて書いている。「彼らは義和団のときのように、私たちを拷問するのだろうか。私たちの目の前で、子どもたちを拷問するのだろうか？ 私は彼らが女としての私にすることについては、考えないようにした」。実際に、一九三七年の虐殺を目撃した一人の外国人は、認めた。「私たちは逃亡する中国人のほうの乱暴を警戒していた。……しかし、けっして日本人に対してではなかった。逆に、日本

人が現われたら平和、静寂そして繁栄が戻ってくると思っていた」。

この時期のアメリカ人とヨーロッパ人の英雄的な努力は枚挙に暇がない（彼らの日記は何千ページにもなる）ので、彼らの行為をすべてここで語るのとは不可能である。この理由により、私はドイツ人のビジネスマン、アメリカ人の外科医、そしてアメリカ人のミッシェン・スクール教授の三人の行為に対象を絞ることにした。大筋では、三人に、大きく異なるところはない。

南京を救ったナチ党员

多分、南京大虐殺に関連して見つけることができる最も魅力的な人格は、ドイツのビジネスマンのジョン・ラーベだろう。市内のほとんどの中国人にとって、彼は英雄で、「南京の生き仏様^{いぼじやうさま}」で、数十万人の中国人の生命を救った国際安全区の伝説的な指導者だった。しかし、日本人にとっては、彼は奇妙で理解しがたい救助者だった。彼はドイツ国籍であり日本の同盟国の市民であるだけでなく、南京のナチ党の指導者だったのである。

一九九六年からジョン・ラーベの人生を調査してきた私は、大虐殺のときに彼と他のナチ党员が書いていた数千ページにおよぶ日記を発掘することができた。これらの日記を調べた結果、私はジョン・ラーベがまさしく「中国のオズカー・シンドラ」だったという結論に行き着いた。

大虐殺以前のラーベは、比較的平和でやや旅の多い人生を過ごしてきた。彼は一八八二年一月二三日に、船長の息子として、ドイツのハンブルクに生まれた。ハンブルクでの徒弟修業を終えたのち、彼はアフリカで数年間働き、一九〇八年に中国に移り、ジーメンス中国本社の北京事務所に職を得た。

一九三一年に彼は南京事務所に転動になり、中国政府に電話機や電気製品を販売していた。はげ頭で眼鏡をかけ、保守的なスーツに蝶ネクタイをしめた彼は、市内の典型的な中年のビジネスマンだった。彼はすぐに南京のドイツ人社会の重鎮になり、小学生と中学生のために、自分でドイツ人学校の運営を担うようになった。

やがて、ラーベはナチズムの忠実な支持者になり、南京市のナチ党の指導者になった。一九三八年に彼はドイツ人の聴衆に語った。「私は我々の政治制度の正しさを信じているだけでなく、党员として、この制度を一〇〇パーセント支持しています」。

数十年後、彼の孫娘のウルスラ・ラインハルトは、ラーベは基本的にナチ党を社会主義組織と見ていて、ドイツにおけるユダヤ人や他の少数民族グループに対する迫害を支持しなかったと主張する。これは確かに真実のように思える。南京でのさまざまな省庁への訪問で、彼は何度も彼のナチ哲学を社会主義の用語で要約している。「我々は労働者の戦士で、労働者の政府で、労働者の友人です。我々は困難なときにもけつして労働者を見捨てません」。

ドイツ国籍の同僚たちのほとんどが、友人や大使館職員の忠告を聞いて日本軍が城門に到達するよりも遙か以前に中国をあとにしたとき、ラーベはとどまる路を選び、やがて安全区の代表に選ばれた。事実、日本大使館の職員が彼を訪れ、その地を去るよう、ずっと強く求めても、彼は残留した。南京陥落時に上司から彼を保護するために派遣された日本軍の岡少佐は彼に尋ねた。「いったいなぜここに残っているのですか？　なんのために我々の軍事にちよっかいを出しませんですかね？　あなたになんの関係があるというんですか？　あなたはここで何かをなくしたわけではないでしょう！」

ラーベはしばらく口をつぐんでいたが、このように、岡に答えた。「私はここ中国に三〇年住み、子や孫もここで生まれました。私はここで幸せだったし、成功もしました。私は中国の人々にいつもよくしてもらってきましたし、戦争のときでさえそうでした。もし、私が日本に三〇年間住み、日本の人たちと同じようによくしてもらっていたら、誓って言いますが、現在中国が直面しているような非常事態のときに、日本の人々を見捨てることはないでしょう」。

この答えは忠節の概念を尊重する日本の少佐を満足させた。「彼は後ろに一步下がら、武士道の義務に關する言葉を口にして、ふかぶかと頭を下げました」。

ラーベはこのように書いている。

しかし、ラーベが自分の身を守るために南京を去るという道を選択しなかったのは、個人的な理由だけによるものではなかった。彼は中国人の従業員の安全に対する責任を感じていたのである。ジーメンズの機械技術者である中国人従業員のチームは、市の主要な発電所のタービンから、すべての庁舎の電話と時計、交番と銀行の警報、そして中央病院の巨大なレントゲン設備までの保守点検を担っていた。「もし自分が見捨てたら、この人たちはみな、殺されたり、ひどい目にあわされたりするのではないかと……私にはそんな予感がありました。事実、それは正しかったのです」とラーベは書いている。

その年の早くから、南京にいたラーベは数えきれないほどの空襲を受け、小さな防空壕に身を潜め、小さな厚板で辛くも身を護っていた。衣服も不足していた。特に、ラーベがひとつの間違いをしでかし

てしまつてからは、深刻だった。九月末のことである。ラーベはドイツ国籍の人が南京から発つときに使用していた船であるクトゥー号に、保管のために衣装ダンスごと積み込んだ。ところが、クトゥー号が漢口に着いたとき、宛先指定のない荷物は投棄され、そのためラーベのスーツは二着だけになつてしまった。しかも、そのうちの一着を、ラーベは彼自身よりもつとそれを必要としていたと思つた難民に譲つてしまつた。

しかし、彼の最大の関心は自分自身の個人的な安全や幸福ではなく、安全区の設立にあつた。委員会のメンバーは安全区がいかなる軍事行動からも除外されることを望んでいたが、日本軍はそこが中立地帯であると認めることを拒絶した。他方、委員会は唐生智配下の人員をその地区から追い出すことが不可能であることに気づいた。それは、唐自身の別荘がその区域内にあつたからである。ラーベにとって、中国軍が区域から撤退することを拒んだだけでなく、地区の中に砲台を設置しようとしたことは、最後の一線を越えるものだった。かんしゃくを起こしたラーベは、唐が即座にその区域から撤退しないならば、安全区の代表の座を辞し、その理由を世界に向けて公表すると脅した。

「彼らは私の希望を尊重すると約束したが履行自体には多少時間がかかると言つた」とラーベは書いている。

ラーベは、上層の権威の助けを借りる必要性を感じた。一月二五日に、彼はアドルフ・ヒトラーに電報を打ち、総統に「非戦闘員の中立区域設置の件に関する日本政府への好意あるお取りなしをいたたくよう」を申請した。同時にラーベは友人であるクリーベル総領事にも電報を送つた。「本日私が総統へお願いいたしました……お取りなしについて、貴殿のご尽力を心よりお願いする次第です。さもないと、

目前に迫った戦闘での恐るべき流血が避けられません。ハイル・ヒトラー！ ジーメンス南京および国際委員会代表ラーベ」

ヒトラーからもクリーベルからも返事はなかったが、間もなくラーベは日本の爆撃のパターンが少し変化したのに気づいた。電報を送る前は、日本軍の飛行機は南京全域を無差別に爆撃していた。送信後、彼らは軍事学校、滑走路、あるいは兵器庫といった軍事目標だけを攻撃するようになった。ラーベは書いた。「これは私の電報のおかげだということになり、とりわけアメリカ人たちは大いに感じるところがあったようでした」。

しかし、彼の勝利は次から次へと発生する危機を受けて、長続きしなかった。当初、ラーベと彼の同僚は安全区内の建物を最も貧しい人たちのために確保しようと望んでいた。人々が殺到するのを避けるため、委員会は市内のいたるところで、難民に、自分たちの友人の家を借りることを強く求めるポスターを貼った。しかし、二・五平方マイルの区域に余りにも多数の人々が押しかけたので、すぐにラーベは最悪の想定よりも五万人も多い居住者がその地区にいるのを知った。難民は建物内に詰め込まれていただけでなく、芝生や溝や防空壕に溢れ出した。幾組もの家族が野外の街路で眠り、アメリカ大使館の横にはむしろで作られた住居がきのこのように立ち並んだ。市が陥落する前に、白線と、立ち並ぶ白い旗および赤い丸の中に赤い十字の記号が示された布で境界を区切られた安全区は、二五万人の難民が溢れ返る「人間の蜂の巣」のようになった。

衛生問題は別の悪夢をもたらした。キャンプ内の汚物、特に便所のひどい状態は、ラーベを激怒させ、

彼が激しい演説をした結果、ジーメンズ社の敷地内の難民センターの状態は許容できる程度に改善された。後に、ラーベがジーメンズのキャンプを視察したとき、彼は便所の状態がよくなっていただけでなく、ジーメンズ社の敷地にある壁がすべて修理されていることに気づいた。「ここに使われたあたらしいきれいな煉瓦がどこからきたのか、だれも私にあかそうとしませんでしたが、ちかくにある建築中の建物がびっくりするほど低くなったのに気づきました」。ラーベは書いています。

だが、食料の不足は安全区の指導者の最大の頭痛の種になった。二月初めに、南京市長は安全区の人々を養うために三万担（二千トン）の米と一万袋の小麦粉を寄付した。しかし、食料は市の外側に置かれ、委員会にはそれを安全区内に運び込むのに必要なトラックがなかった。中国軍はすでに二万人の人員と五千箱の故宮博物館の財宝を市から運び出すために、ほとんどの車両を徴発していた。死に物狂いの市民や個々の兵士たちが、残りのほぼ全部を盗み取った。他の選択肢がない中で、ラーベとその他の外国人たちは、少しでも多くの米を安全区内に運び込もうと、必死になって自分の自動車で南京市内を駆け巡った。日本軍が市を砲撃する中で、外国人たちは輸送を続けていた。一人の運転手は実際に砲弾の破片によって、片目を失った。結局、安全区の指導者たちは寄付された食料全体の中の一部分だけ、一万担の米と一千袋の小麦粉だけしか確保できなかったが、この食料は安全区の難民たちの飢えを食い止めるのに、大いに役に立った。

一二月九日に目前に迫る恐ろしい状況を認識した委員会は、三日間の休戦（第三章参照）を交渉した。その間は日本軍がそのままの場所に留まり、中国軍は城外に平和裡に撤退する。しかし、蒋介石は休戦

に同意せず、日本軍の翌日からの南京に対する激烈な砲撃を促すことになった。二月一二日に、委員会は再び中国軍の申し出を受け、今回は降伏するというものだったが、この計画も失敗した。

そのような状況の下、その日のラーベには事態の成り行きを見つめながら待つこと以外にできることはなかった。彼は目の前の出来事の推移を刻々と記録している。彼は二月一二日の午後六時三〇分の日記に書いた。「紫禁山の砲はひっきりなしに轟いている。あたりいちめん、閃光と轟音。突然、山がすっぽり炎につつまれた。どこだかわからないが、家や火薬庫が火事になったのだ」。そのとき、ラーベは市の運命を予告する中国の古い言葉を思い出した。「紫禁山の燃える日、それは南京最後の日。昔からそういうではないか」。

午後八時、ラーベは市の南の空が炎で赤くなっているのを見ていた。そのとき、彼は家の両側の門を必死になって叩いている音を聞いた。中国人の女性や子どもたちが、中に入れてくれるように懇願し、男たちは彼のドイツ人学校のうしろの門壁をよじ登り、人々が彼の庭の溝の中にうずくまり、彼の所有地に爆撃しようとする飛行士に警告するために広げられていた巨大なドイツ国旗の下にまでもぐりこんでいた。泣き声と門を叩く音は、ラーベの忍耐の限度をこえるほどにまで大きくなった。彼は門を開けて、群集の中に入った。しかし、夜が更けるにつれて物音は大きくなる一方だった。ラーベは鋼鉄のヘルメットをかぶって、庭中を歩き回り、だれかれなしに静かにしろと怒鳴りつけた。

午後一時半、ラーベは驚くべき訪問者を迎えた。それはクリスチャン・クレイガーで、彼はドイツの技術企業カルロヴェイツ商会に勤務する三〇代半ばのナチ黨員だった。長身で金髪のこの技術者は、大きな製鉄所を建設するためにはるばる中国にまでやって来たのだが、ラーベと同じように、南京の異

常事態に巻き込まれたのだった。国際委員会はクレーガーを会計担当に任命した。

クレーガーがラーベ宅に立ち寄ったのは、中山路には中国軍が撤退時に捨てた兵器や物資が散乱していることを告げるためだった。

ある人はバスを放棄して、それを二〇ドルで売りに出しているという。

「どう思いますか、誰か買う人がいるだろうか」

「しかしクリスチャン、どうやって？」ラーベは言った。

「まあ、私はその男に明日、私の事務所に来るよういつてあります」

最終的に、彼の家の周りの騒音は少なくなつて行つた。二日間、衣服を着替える暇もなく疲れきつていたラーベはベッドに倒れこみ、彼が知り、愛してきた周囲の社会が崩壊していく中で、自分をくつろがせようと努力した。彼は交通部の庁舎が焼け落ち、市がいつ陥落してもおかしくない状態であることを知つていた。ラーベは、今の状態からは物事がこれ以上悪くなることはなく、よい方向に向かうしかないのだと自分に言い聞かせた。中国人の同僚たちが彼に言った。「日本人を恐れる必要はありませんよ。彼らが全市を掌握したら、平和と秩序が戻るでしょう。上海までの鉄道もすぐに再建され開通するし、商店も正常な状態に戻るでしょう」。眠りに落ちる前に、ラーベは考えた。「最悪の状態が克服されつつあることについて、神に感謝します！」

翌朝、再び空襲の音で目覚めた。明らかにすべての中国軍が市を追われたわけではないのだ。彼はそ

う考えた。時刻は午前五時だったので、ラーベは再び横になった。市内の他の人々と同様、ラーベは空襲にさらされ続けたために、爆発には驚かなくなっていた。

その日の朝、少し時間が経ってから、ラーベは市内に出かけて、損害の状況を調べた。街路にはおびただしい中国人の死体が転がっていて、彼らの多くは民間人で背中を撃たれていた。彼は日本兵の集団がドイツのコーヒー店に押し入ろうとしているのを見た。ラーベが店にかかるドイツ国旗を示して彼らを叱責すると、英語を話す日本兵が逆切れして言った。「俺たちは腹ぺこなんだ！ 文句があるのなら、日本大使館に行け。代金はそこで支払うだろう」。また、日本兵はラーベに、補給部隊がまだ到着していないこと、たとえそれが到着しても、十分な食物を得られるとは期待していないということ話を話した。後にラーベは、兵士たちがコーヒー店を略奪した後、放火したことを知った。

もつと悪い事態が訪れた。ラーベは遠くに北に向かって行進する日本兵を見た。彼らは南京の南部から市の残りの地区を占領しようとして行進していたのである。すぐにラーベは、彼らを避けるために北に向かつて自動車を走らせ、市の幹線道路である中山路に着くと、外務省内の赤十字病院に停車した。中国人職員は建物から逃亡していて、あらゆる場所に死体があった。部屋にも、廊下にも、病院の出口にさえも、死体が詰まっていた。

その日、ラーベは残留している中国軍に出会った。彼らは安全に揚子江を渡ることができずに行き場を失い落伍した人たちで、餓えて疲れきっていた。山西路のロータリーを通り抜けようとしたときに、彼は四〇〇名の中国軍部隊に会った。彼らはみな、まだ武装していて、日本軍が進んでくる方向に向かつて行進していた。ラーベが突然の「人道主義的な衝動」に駆られたのはそのときだった。この衝動は、

その後、数年間ではないとしても、数ヶ月間はずっと彼の良心にずっとつきまといつていくものだった。ラーベは中国兵たちに、南に日本軍の部隊がいることを知らせ、さらに機関銃を捨て、安全区の難民に加わるよう勧めた。短い議論の後、彼らはラーベにしたがって安全区に入ることに同意した。

同じように、何百人もの中国兵が市の北部に閉じ込められ、川を渡る脱出路を確保することができないことに気づいたとき、多くは死から逃れようと安全区に乱入し、アメリカ人とヨーロッパ人の管理者に生命を救ってくれるよう懇願した。委員会のメンバーには彼らを助けるべきかどうか分からなかった。いずれにしろ、委員会は兵士たちのためではなく民間人のための避難所を設立したのである。委員会はこの問題を日本軍の司令部に訴えてジレンマを解決しようとしたが、漢中路の大尉より上の人間には接触できなかった。

結局、兵士たちの窮状に動かされた委員会は彼らの嘆願に押し切られた。彼らは、ラーベと同じように、兵士たちが武器を捨てれば、日本人は兵士たちを慈悲深く扱うかもしれないと説得した。そのようにして、彼らは兵士たちの武装解除を手伝い、彼らを、中立地帯のあちこちの建物で民間人と混ぜておくことにした。

翌日、ラーベはこの状態を日本軍司令官に説明する長い手紙を書いた。彼は日本人が元兵士に対して慈悲深くなり、戦時国際法に準じて人道的に取り扱うように懇願した。これに応え、ある日本軍の士官はラーベに中国兵の生命を救うことを約束して、ラーベを安心させた。

しかし、日本軍がラーベを裏切り、武装解除した兵士たちを連行して処刑し始めたときに、ラーベの安心は恐怖に変わった。もしラーベが日本軍には数十万人の民間人から元兵士を見分けることができな

いのではないかと期待していたとするならば、それは重大な誤りだったといえる。日本人は毎日銃を使用している人の指のある特定の場所にはたがができることを知っていて、彼らの手を検査することによってほとんどすべての元兵士たちを見つけ出してしまった。彼らは肩に背囊の痕がついていないか、額や髪型に軍帽の痕がついていないかどうか、あるいは長期の行軍による靴擦れができていないかどうかも調べた。

一二月一四日の夜に開かれたスタッフ会議で、委員会は日本人が安全区の本部に近い地域から一、三〇〇人を連行して銃殺したことを確認した。「彼らの多くが元兵士だったことは知っていたが、ラーベはある士官から、彼らの生命を救ってもらえるという約束を得ていた」。YMCA代表のジョージ・フィッチはこの出来事について日記に書いている。「そのとき、彼らがしていることが完全に明らかになった。銃剣を構えた兵士たちにより、百人ぐらいつの集団でロープに繋がれた男たちが並ばされていた。帽子を被っていたものは乱暴にそれを引き剥がされ、地面に投げ棄てられた。ヘッドライトに照らされている中で、私たちは彼らが破滅に向かつて行進して去っていくのを見つめていた」。

「果たして自分にそんなことをする権利があったのだろうか？ あれでよかったのだろうか？」ラーベは兵士たちを安全区に収容した自分の決断について書いている。

その後の数日間、ラーベは救いようのない気持ちで、日本人がさらに何千もの兵士たちを安全区から引き摺り出して処刑するのを見ていた。日本人は、たとえば、人力車の車夫、手工業の職人、あるいは警察官たちなど、たまたま指や額や足にたこのある無関係な男たちを何千人も殺した。後にラーベは、

市内にあった仏教系の慈善団体である紅卍字会がひとつの沼だけから一二〇体以上の死体を回収したのを目撃した（後の報告書で、ラーベは南京のいくつかの池が多数の死体が埋められたために消滅したと指摘した）。

国際委員会の代表であるとともに、日本の当局に対する確かな一定の重みのあるナチ党の地区代表として、ラーベは日本大使館に手紙を書き、送りつづけた。当初、彼はドイツ国民でナチ党の指導者として彼が意識している義務、つまり日独両国大使館の間の良い関係を維持しなければならないという義務のために、自分の怒りを抑制し、慎重に丁寧さを保っていた。彼は委員会のアメリカ人のメンバーが書いた日本大使館への書簡を彼が見直し、その中に「いくらかの蜜を加える」ことを認めてくれるよう頼んだ。

一方、日本の外交官たちはラーベの書簡と訪問を、上品な微笑と役人としての慇懃な態度で受け入れた。しかし、ラーベはいつも同じ答えを聞かされるだけだった。「軍当局に報告します」。その後、毎日、生々しい虐殺行為の無慈悲な猛攻が吹き荒れる中で、ラーベが日本人に送る書簡は、憤激の叫びが滲み出した手厳しいものになっていった。

市内に、現在、残っている二七人の西欧人と、中国人の住民のすべてが、あなた方の兵士たちによって一二月一四日から始まった、強盗、略奪そして殺人の統治に、完全に驚愕しきつていきます。

安全区内にも入口にも、日本のパトロール兵は一人もいません。

昨日、白昼の下、ミツシヨン・スクールの何人かの女性たちが、多数の男性、女性、子どもたちでいっぱいになっていた広い部屋の中で強姦されました！ 私たち二二名の西欧人には、二〇万人の中国の民間人に食料を与え、さらに彼らを保護することはできません。それは日本の当局の義務のほうです。あなた方が彼らを保護してくれば、私たちは食料の提供を手伝うことができます。

このような暴虐が続けられるのならば、最低限の公共活動を復旧するための作業員を見つけることも、ほとんど不可能になるでしょう。

ラーベや他の国際委員会のメンバーは、徐々に、外交官たちの回答の真意を読み解けるようになった。発砲を命じているのは大使館ではなく軍なのだ。日本大使館の秘書官福田篤泰は、ラーベに何度も言った。「軍部は南京を踏みじろうとしています。けれども大使館員の我々はなんとかしてそれを防ぎたいと考えています！」。実際に、荒れ狂う大虐殺の中で、ある大使館員は国際委員会に、事実を日本で直接公表し日本の世論の圧力で日本政府に何らかの措置を講じさせたらどうかと示唆した。しかし、同時に、別の大使館職員はラーベに「新聞記者に不利なことを話せば、日本軍全体を敵に回すことになりませんよ」と言って、沈黙を守るよう迫った。

最後には、同盟国の政府関係者であるという立場だけを自己防衛の手段として、ラーベは、現在から見ると考えられないようなことを始めた。彼は、市内を彷徨して、自分で虐殺を防ごうとしたのである。

ラーベが市内を自動車で走っていると、必ず誰かが飛び出してきて、自動車を停めさせ、現に行われている強姦をやめさせるよう懇願した。たいていの場合、強姦されているのは、妹であり、妻であり、あるいは娘だった。ラーベは彼を自動車に乗せ、強姦の現場に案内させた。あるときには、獲物を捨てて逃走する日本兵を追いかけ回し、あるときには少女の上にかぶさっている日本兵の身体を持ち上げて引き離れた。彼は、このような冒険が非常に危険であることを知っていた（「日本兵は拳銃と銃剣をもっていました。……私にはナチのバッジとハーケンクロイツの腕章しかなかったのですから」。彼はヒトラーへの上申書に書いている）。しかし、彼の行為を妨げるものは何もなかった。生命の危険すら、彼を思いとどまらすことにはならなかった。

一九三八年一月一日付けの彼の日記は典型的にこの事情を物語っている。「若い魅力的な少女の母親が私のところに来て、ひざまずいて泣きながら、彼女を助けてほしいと言った。（家に）はいると、真っ裸になった日本兵が狂ったように泣き叫ぶ少女にのしかかっていた。私はこの恥知らずの豚野郎に向け、彼が理解できる言葉で叫んだ。『新年おめでとう』。彼は、裸のままパンツをつかんで逃げていった」。

ラーベは市内の暴行にぞつとしていた。彼が通る街路には強姦され、切断された多数の女性の死体が、焼け焦げた彼女らの家の前に転がっていた。「三人から一〇人くらいずつ徒党を組んだ兵士たちが街や安全区を闊歩しはじめ、手当たり次第に略奪しました」。ラーベはヒトラーへの上申書に書いている。

彼らは女性や少女を強姦し続け、少しでも抵抗するものや、彼らから逃げ出そうとするもの、あるいは単に運悪くその時刻にその場所に居合わせた人間を見境なく殺し続けました。八歳に満たない少女から七〇歳を超える女性までが強姦され、最も残忍な方法で、殴り倒され、打ち据えられました。私たちはビール瓶で辱められた女性の死体や、竹の棒を突き刺された死体を見つけました。これらの犠牲者を私はこの目で見たのです。いまわの際の彼女らとも口もききました。これらの死体を鼓樓病院の遺体安置所に運ばせ、私は自分自身で、これらの報告が真実に基づいたものだということを確かめました。

ラーベが愛してきた都市の焼け焦げた残骸の間を歩いていくと、ほとんどすべての通りの角に、美しい日本軍のポスターが貼ってあるのが見え、それを讀むと、「日本軍を信じなさい。日本軍はあなた方を保護し、食料を与えます」と書いてあった。

中国人の生命を救うために、ラーベは可能な限りの人々を受け入れ、自分の家と事務所をジーマンスの従業員とその家族のための避難場所に変えた。また、何百人もの中国女性を自分の所有地に匿い、彼女らが裏庭の小さな藁小屋に住むことを許した。これらの女性たちとともに、ラーベは彼女たちを日本の強姦者から護るための警報システムを作り上げた。日本兵が彼の敷地の壁によじ登ってきたら、女性たちはホイッスルを鳴らし、ラーベを庭に送り出して犯罪者を追い払った。このような事件は非常に頻繁に起こったので、ラーベはほとんど、夜間には自分の家を出なかった。彼がいなくなると、日本の侵

入者たちが強姦の狂宴を始めるのではないかと恐れたのである。ラーベは日本軍の将校たちにこの状態を訴えたが、彼らは問題を真剣に考えようとしなかった。ラーベが裏庭の藁小屋のひとつで女性を襲っていた兵士を捕らえたときにさえ、軍将校は強姦犯を平手打ちにしかただけで、それ以上には罰しようとしなかった。

二〇人余りの人間で数十万人の市民を五万人以上の日本兵から護るためにできることの無力さについてラーベは苛立ちを感じていたかもしれないが、それを表に出すことはなかった。彼は、日本人にはけつして弱みを見せず、「堂々たる態度と迫力」で彼らを圧倒しなければならぬことを知っていた。

幸運なことに、ナチ党員という彼の立場は、かなりの日本兵に、少なくとも彼の目の前では、それ以上の乱暴を犯すことを躊躇させた。地区YMCA書記のジョージ・フィッチは書いている。「彼らの誰かが反論すると、(ラーベは)彼のナチ党の腕章を突き出し、かの国の最高の徽章を示して、これが何を意味しているか君らに分かるかと尋ねた。いつでも、てきめんの効果だった！」日本兵はこの南京のナチを尊敬しているようだったし、ときには、畏れているようにさえ見えた。日本の兵卒たちはアメリカ人に対しては、殴りつけたり、銃剣で攻撃したり、ひどい場合には宣教師を階段から突き落とすようなことをしても平気だった。ところが、ラーベや彼の国の同僚に対する場合、彼らは十分に自制的に行動した。たとえば、強姦と略奪の最中の日本兵たちがエドゥアルト・シュペアリングのハーケンクロイツの腕章を見て「ドイツだ！ ドイツだ！」と叫び、逃げていったということもあった。あるいは、ハーケンクロイツがラーベの命を救ったと思われる事件もあった。ある日の晩、日本兵が彼の敷地内に押し入

り、ラーベは懐中電灯を手に彼らに向き合つた。彼らの一人が拳銃に手を伸ばし、ラーベを撃とうとしているようだったが、「ドイツ関係に発砲するのは割に合わないことだ」と思い直したようで、断念した。日本人がラーベを尊敬していたとするのならば、中国人の難民たちは彼を崇拜していた。彼らにとつて、ラーベは性奴隷にされる娘たちや、機関銃で撃ち殺される息子たちを救い出してくれた人だった。安全区の難民キャンプではラーベがいることだけで大騒動になることもあつた。ある日、ラーベが安全区を訪れると、何千もの中国人女性が彼の前に身を伏せ、泣きながら保護を請い、安全区を去つて強姦され、拷問されるのならば、その場で自殺すると訴えた。

ラーベは、暴虐という嵐の只中にいる難民たちが生きる希望を持ちつづけられるよう、気を遣い努力した。彼は裏庭に住む難民の女性が生んだ子どものささやかな誕生祝の会を催した。産まれた男の子は一〇ドルのお祝いを受け取り、女の子は九・五ドルのお祝いを贈られた（ラーベはヒトラーへの上申書で説明している。「中国では女の子は男の子ほど値打ちがないのです」。多くの場合、男の子が産まれると「ラーベ」の名前をもらい、女の子が産まれると彼の妻の名前をもらつて、「ドーラ」と名づけられた。

最終的に、ラーベの勇氣と寛大さは、国際委員会のほかのメンバーの尊敬を勝ち取つた。ナチズムには根本的に対立しているメンバーも例外ではなかつた。ジョージ・フィッチは友人への書簡で、ラーベや南京の他のドイツ人との友情を保つために「ナチのバッジを身につけようかとさえ」思つたとまで言っている。ナチズムとはいかなる意味でも相容れないロバート・ウィルソン博士でさえも、家族への手紙の中でラーベへの賛歌を書いている。「彼はナチの社会では突出している。この教週間の彼との緊密な付き合いを経てから、彼がどんなにか素晴らしい人間かを知り、恐ろしいほど素敵な心を持つていること

を発見した。彼の人格と、總統への追従の間の食い違いを説明することは難しい」。

南京でただ一人の外科医

すべての外科医が去つていつた南京にロバート・ウイルソンが残つたのは驚くべきことではない。南京は、彼が生まれ、少年時代を過ごした場所で、彼の心にはそこが特別な場所であるという思いが常に刻みつけられていた。一九〇四年に生まれたウイルソンは、南京の教育機関の設立に大きく貢献してきたメソジスト派の宣教師の家庭で育てられた。彼のおじジョン・ファークソンは南京大学の創立者である。彼の父は市の叙任牧師で中学校の指導員としても働いていた。彼の母は大学教育を受けたギリシヤ人の学者で、複数の言語を流暢に話し、宣教師の子女のための学校を経営していた。ロバート・ウイルソンは一〇代の時期に、後に中国を素材にした文学作品でノーベル賞を受けたパール・バックに幾何学を学んでいる。このような環境下で成長し、卓抜した知的能力を示したロバート・ウイルソンは、一七歳のときにプリンストン大学の奨学生資格を獲得した。大学卒業後、コネティカットの高校で二年間ラテン語と数学を教え、ハーヴァードの医学部に転入し、ついでニューヨークの聖路加病院のインターンを務め、そこで看護婦長に求婚して結婚した。しかし、彼は、アメリカ合衆国でのキャリアを求めるよりも、自分の将来の場所を生まれ故郷の南京に置こうと決心し、一九三五年に新婦を伴つて、南京に戻り、南京大学病院の医師として働くことになった。

南京でのウイルソン夫妻の最初の二年間は、おそらく彼らの人生における最も牧歌的な時期だっただろう。魅力的な時間がゆっくりと流れていた。ほかの宣教師夫妻と晚餐を取り、外国大使館の優雅な茶

会やレセプションに参加し、郊外の広大な別荘での専用の料理人や召使がいるパーティーに招かれた。夕方には、中国の古典を漢文で読み、自分の知識を深めるために家庭教師の個人教授を受けた。毎週、水曜日の午後はテニスに興じた。時には、妻と連れ立って湖に行き、船上で食事をし、赤い蓮の花が咲く水辺を散歩して、芳しい空気を吸った。

しかし、戦争はウイルソン夫妻が南京で満喫していた悠久の静かな時間を永遠に打ち砕いてしまった。七月の盧溝橋事件の後、日本の毒ガス攻撃を恐れた南京の人々は、外出するときに層を重ねたガーズに化学溶剤を浸したガスマスクを持ち歩くようになった。日本軍が南京の空爆を開始した一九三七年八月より前に、彼の妻マージョリーは幼い娘エリザベスとともに砲艦に乗船し、無事、牯客に移っていた。しかし、ウイルソンは、戦争が続くと妻子が路頭に迷いはしないかと案じて、アメリカに戻るべきだと説得した。ウイルソン夫人はその意向に従い、ニューヨークに戻って聖路加病院に勤務し、彼女の母親が幼子の世話をした。しかし、ウイルソン博士自身が南京に止まることにはいかなる疑問もなかった。「彼はそのことを義務だと思っていました。中国人は彼の仲間だったのです」。ほぼ六〇年も経った後で、彼の妻は回想した。

その秋、孤独を紛らわすために、ウイルソンは、パール・バックの前の夫であるJ・ロッシング・バックの家に移ったが、やがてその家は彼の友だちでいっぱいになった。それは外科医のリチャード・ブラデー、連合キリスト教伝教団のジェイムズ・マツカラムといった人々で、彼らは後に南京安全区の国際委員会のメンバーとして働いた。彼らの多くは、ウイルソンと同じように妻子を南京から避難させていた。

患者の世話で忙殺されていないときに、ウイルソンはたびたび家族に手紙を書いた。ほとんどの手紙には日本軍の空爆の被害者の身の毛もよだつ描写が含まれていた。それは、たとえば、うずくまった少女の背中が爆撃され、臀部がえぐられたというような恐ろしい情景だった。彼は死傷者から爆弾の破片や銃弾を大量に摘出したので、戦争が終わる前に「立派な博物館」を開くことができそうだと、手紙の中で皮肉った。

日本軍は、病院を爆撃しても、少しも心痛を感じないことをウイルソンは知っていたが、病院に通って勤務を続けた。九月二五日に、南京が経験した最悪の空爆のひとつといえる激しい攻撃を受けたときには、日本軍は、屋上に大きな赤十字がはつきりとペンキで描かれている中央病院と衛生部に、二つの千ポンド爆弾を投下した。爆弾は一〇〇人の医師と看護婦が隠れていた防空壕の僅か五〇フィート（約一五メートル）先に落ちた。

ウイルソンは、日本軍の爆撃を誘導する危険性を最小化するために、できる限りの手を打った。窓は、日本の飛行士から室内の灯りを遮るために、黒い厚手のカーテンで閉ざされた。しかし、市内では、夜間に赤や緑のカンテラで飛行士を重要目標に導くスパイがいるという噂がささやかれていた。ある日の空爆のときに、緑色や黒色の覆いではなく赤い覆いを被せた懐中電灯を持った部外者がこっそりと病院に入り込み、毒ガスの浸透を防ぐために頑丈に閉じられていた窓を開けようとして、人々の疑念を掻き立てた。彼が中国軍の飛行士の入院患者に中国軍の爆撃機の飛行高度や航続距離を尋ねたときには、人々は眉をつりあげた。

秋の訪れが迫った頃、ウイルソンは自分が怖しいほど働きすぎていることに気がついた。以前に比べ

ると、はるか多数の人々が医療の世話を必要としていた。日本軍の空爆による民間人の犠牲者に、上海から戻ってきた兵士たちが加わっていた。上海から蕪湖までの地域の病院には、およそ一〇万人の中国軍負傷兵がいた。南京北部の近郊の下関では、列車が到着するたびに、駅にこれらの負傷兵が降ろされた。あるものは駅の床に倒れこんだまま死に、他のものはあてもなく足を引き摺りながら市内を歩き回った。回復したものは前線に戻ったが、脚や腕を失うなど、ひどい障害を受けて回復を見込めない者は、二ドルの補償金と家に戻れという命令を受け取って解放された。ほとんどの兵士の故郷は遠く離れたところにあつた。そこに行き着くだけの金銭や体力を持っていない人はいなかった。指導者に見捨てられた中国の兵士たち、失明し、脚を失い、負傷や感染によって消耗しきつた彼らは、通りで物乞いをするしかなかった。

状況が悪化するに反比例して、病院の職員数は減少していった。中国人の医師と看護婦は、西方に移動する数十万人の南京住民に加わって、逃げ去っていった。ウイルソンは能力の限りを尽くし、交戦法規の下では、市の陥落後のことを怖れる必要はないのだと主張して、彼の医療スタッフが立ち去ることを思いとどまるよう説得した。しかし、結局のところ、ウイルソンには彼らに残ることを決心させることはできなかった。一二月の最初の週末には、南京大学病院の医師は三人だけになった。ロバート・ウイルソンとC・S・トリマー、そして中国人医師の三人である。アメリカ人の外科医リチャード・プレイデリーの牯峇にいた娘が重病になり、ウイルソンを除けば最後の外科医だったブレイデリーが南京を去ったときに、ウイルソンは、南京に残された本格的な切除手術を執刀できる唯一の人物になった。二月七日に彼は書いた。「戦争に引き裂かれた巨大な都市で、ただ一人の外科医になったというのは、も

のすごいことだ」。

その一週間後に、ウイルソンが命を落とす寸前の事件が起こった。一月一三日の午後、彼は爆弾によつて眼に重傷を負つた患者に難しい手術を施すことにした。ウイルソンは一方の眼を救うために、片方の目に残っているものを除去しなければならなかった。眼球を半分取り出したときだった。ウイルソンから五〇ヤード（約四五メートル——訳者）離れた地点に着弾して爆発し、窓が打ち砕かれ、室内に砲弾の破片が飛び散つた。誰も死ななかつたし、怪我もしなかつたが、ウイルソンは看護婦たちが「当然、ひどく震えている」のに気づいた。彼女らは手術を続けなければならぬかどうかを知りたがつた。「もちろん続ける以外に方法はなかつたのだが、あれほど早く摘出された眼球はなかつたと思う」。ウイルソンは書いている。

一月一三日の夜が更ける前に、日本軍は歴史ある首都を完全に掌握した。ウイルソンは市の至る所に日本の旗がはためいているのを見た。翌日、征服者の軍隊は市内の病院を接収し始めた。彼らは、外交部の敷地内にあり、赤十字の支部を組織していた安全区のメンバーの管理下にあつた、中国軍の主な病院に乱入し、中にいた何百人もの中国兵を捕虜にした。日本人は医師が病院内に入ることも、負傷した兵士に食物を送ることも許さなかつた。その後、負傷兵たちは連れ出されて、組織的に射殺された。四つの赤十字病院のうちの三つがこのような形で日本軍の手に落ちた後に、国際委員会はその労力を南京大学病院に集中させることにした。

占領直後の数日間、ウイルソンは日本兵が市を略奪し、放火するのを見ていた。日本兵が南京大学病院で略奪を行うのを見て、自分が彼らの窃盜行為を止められないのに苛立ち、看護婦からカメラを取り

上げようとしている兵士に対し、心の中で「すばやいケリ」を入れた。また、彼は兵士たちが通りで樂器を積み上げて火をつけているのを見て、こうした財産の破壊は南京の人々にあとで日本製品を買わせるための策略ではないかと疑った。

彼は自分の家が荒らされている場面も目撃している。損害を調べるようと危険を冒して家に戻ったときに、彼は三人の日本兵が家で略奪を行っている現場に遭遇した。彼らは屋根裏部屋に侵入し、大きなトランクを開き、中身を床いっぱい撒き散らしていた。ウイルソンが入ってきたとき、一人の兵士は顕微鏡を覗き込んでいた。彼を見ると、兵士たちは階段を駆け下り、ドアから外に逃げていった。「圧巻だったのは、二階のありさまだった。そこでは、一人の日本兵が便器から一フィートの便所の床に、名刺代わりとばかりに排泄物を出していた」。ウイルソンは書いている。「彼はそれに、部屋にかけてあったきれいなタオルをかぶせていた」。

しかし、どのような略奪も、彼が市内で目撃した強姦や殺人には比較できない。戦場の外科医として、いろいろなことに慣れていたウイルソンではあったが、残虐行為の激しさにはショックを感じた。

一月一五日 民間人の殺戮は凄まじい限りだ。私はほとんど信じがたい強姦と残虐行為を、何ページでも書きつづけることができる。

一月一八日 今日、ダンテ地獄篇の現代版の六日目だ。そこには膨大な流血と強姦の文字が綴られている。大規模な殺人と何千件もの強姦。残忍性、強欲、そして野蛮の突風は止まるこ

とがないようだ。最初、私は彼らの怒りを掻き立てないよう、彼らに対して愛想よく振舞おうとした。しかし、微笑は徐々に失われ、私の視線は彼らと同じように冷たく、疑い深いものになった。

一月十九日 貧しい人たちからすべての食料が盗まれた。彼らは恐ろしいほどに傷つけられ、狂乱状態に陥っている。いつ終わるのだ！

クリスマス・イブ 彼らは、安全区内にまだ二万人の兵士がいると我々に語り（その数字がどこからきたのか、誰も知らない）、彼らを狩り立て、全員を射殺するといっている。それは、市内にいる一八歳から五〇歳までの健康な男性すべてということになるだろう。今後、彼らは再び世間に顔向けができると思っているのだろうか？

年の瀬になると、彼の手紙は宿命論的な雰囲気帯びるようになった。「唯一の慰めはこれ以上悪くなり得ないことだ」。二月三〇日に彼は書いている。「彼らはいなくなった人々を殺すことはできない」。

ウィルソンたちは、日本人が中国兵を駆り集めて、射殺し、死体を空襲に備えて掘られた土の防空壕に詰め込んでいるのを何度も見た。防空壕は巨大な墓穴になっていた。しかしウィルソンは、多くの中国人が、日本軍に何らかの脅威を与えたからでなく、その身体を実用的な目的に使用するために処刑されたのだと聞いた。南京陥落後、中国人が戦車の通行を妨害するために掘った大きな塹壕が一杯になるまで死体や負傷兵の身体で埋められた。その上を戦車が通過できるだけの死体を日本人が確保できない

ときに、彼らは近所の住人を射殺し、そこに投げ入れたというのである。この話をウイルソンに語った目撃者は、彼の証言を確認する写真をとるためにカメラを借りた。

これらの殺人を防ぐためにウイルソンができることは、ほとんど何もなかった。ウイルソンが立ち向かった日本兵たちは、ウイルソンや他の外国人たちを脅かすために、しばしば、これ見よがしに、銃弾を装填したり、それを抜き取ったりして、武器をもてあそんでいた。ウイルソンは背中から撃たれる危険をずっと感じていた。

南京でウイルソンが見た最悪の光景のひとつは、街路での一〇代の少女たちに対する大掛かりな輪姦だった。ウイルソンは一生涯、その光景を忘れることができなかつた。一五歳から一八歳までの若い女性の集団が日本人によつて一列に並ばされ、土の上で次から次へと、一連隊の兵士たち全員に強姦されていった。あるものは出血のために死に、他のものはその直後に自殺した。

しかし、病院内の光景は街路でのそれよりもさらに恐ろしいものだった。ウイルソンは緊急治療室で、腹部を切り開かれた女性たち、日本人が生きたまま焼き殺そうとして黒焦げになり恐ろしいほどに容貌のくずれた男性たち、あるいは彼が紙に描写することができなかった多数の恐怖を、次々と目にして心を痛めた。彼は、切り落とされかかった首が頸部でぐらついていた女性を決して忘れることはないと言った。「今朝、悲惨な窮状の恐ろしい身の上の女性がまた一人来た」。病院の医療ボランティアが、この女性のことを一九三八年一月三日の彼の日記に書いている。

彼女は日本軍の兵士が彼らの一医療部隊で使うために連行した五人の女性の中の一人だった。

昼間は彼らの衣服を洗わせ、夜には強姦するために。彼らの二人は一五人から二〇人の男を満足させることを強制され、最も可愛らしい女性は毎晩四〇人に犯された。私たちのところに来たこの女性は、三人の兵士に呼び出され、離れた場所に連れて行かれて、そこで彼らは彼女の首を切り落そうとした。首の筋肉は切断されたが、彼らは脊髄を切断することには失敗していた。彼女は死んだ振りをして、自分の力で病院までたどり着いた。こうして、彼女は兵士たちの蛮行を目撃した多数の証人の新たな一人になった。

ウイルソンは、苦痛と受難の渦中にある患者たちの中に強い精神力を持つている人がいるのに驚かされることもあった。一九三八年の元旦の日付の家族への手紙の中で、彼は生存者の信じがたい話を書いている。中国兵が南京の南郊の小さな村にある二九歳の女性の家を焼き払い、五人の幼い子どもたちを連れて徒歩で首都に向かうことを強いた。夜になる前に、日本軍の戦闘機が彼らに向かって急降下して家族に機銃掃射し、弾丸は母親の右目と頸を貫いた。彼女はショックで気絶したが、翌朝、血の海の中で意識を取り戻すと、横で子どもたちが泣いていた。彼女の最年少の子どもである三ヶ月の嬰兒を抱いていくには余りにも体力が弱りきっていたので、彼女はその子を空家に残してきた。なんとか力を振り絞って、残った四人の子どもたちと南京への苦しい道を進んで、ようやく病院にたどり着くことができたのだ。

ウイルソンとボランティアたちは、疲れ切つて倒れる寸前まで病院に残った。国際委員会は市外からの医療の援助を受けられるはずだったが、日本人は医師や医療ボランティアが南京市に入ることを

許さなかつた。そのために、病人の世話と安全区の管理の重荷は、包囲下にあつた二〇人ほどの人々たちによる小さな委員会にのしかかつた。彼らは、毎日二四時間、少なくとも一人の外国人がいて日本人から病院を護つてゐる状態を維持するために交代で勤務した。彼らの何人かは風邪を引き、インフルエンザやさまざまな病気に冒された。大虐殺の間、ウイルソン以外の市内の唯一の西欧人の医師だつたC・S・トリマーは華氏一〇二度（摂氏三九度——訳者）の高熱に冒されながら奮闘してゐた。

ウイルソンは行き場のない患者の退院を拒否してゐたので、南京大学病院は急速にもうひとつの難民キャンプになつていつた。病院を出る患者たちは、自分の家に安全に戻れたことを確認するために、外国人が送つていつた。ジェイムズ・マッカラムは病院の専用運転手役を務め、塗装がはがれ、ぼろぼろになつた救急自動車でも市内を走り回つた。大虐殺の生存者は、疲れきつたマッカラムが患者を家に運ぶときに、眠り込まないよう冷たいタオルを顔に当ててゐたのを覚えてゐる。しかし、冷たいタオルを使つても眼を開けていられなくなつたときに、彼は血が出るまで自分の舌を強く噛んだ。

南京の人々の中に、病院でのウイルソンほど強く自分を駆り立てて頑張つてゐた人はいなかつた。虐殺と強姦が徐々に収まつてきたときに、他の医師の何人かは、週末に緊張を解きほぐすために上海に行つた。しかし、ウイルソンは昼も夜も、時間を省みず、冷酷に見えるほどに、患者の手術を続けてゐた。ほぼ六〇年の後にも、生存者たちは彼の無私の状態を覚えてゐる。生存者たちは大きな尊敬の念を抱いてウイルソンを語る。少なくとも彼らの中の一人は、ウイルソンの手で行われた手術の準備やそれが成功した結果を詳しく話してゐる。彼は無償で手術を行つた。彼に金銭を払える患者は皆無に近かつたのである。しかし、手術は彼自身の健康を損なうという怖ろしい代償を課すものだつた。彼の家族は、結

局のところ、彼の敬虔なメソジストとしての信仰と中国に対する愛情が、南京大虐殺の中で生き続ける勇気を彼に与えたのだと、信じている。

南京の生きている女神

ウィルヘルミナ・ヴォートリン（またはミニー・ヴォートリン、ほとんどの人々は彼女をそう呼んだ）。占領当事、金陵女子文理学院教育部の教師で学部長だった彼女は、南京大虐殺の初期の教週間、市内に残っていた数少ない西洋人女性の一人である。後年、彼女は日本兵から数千人の女性を護った勇氣によってだけでなく、彼女が書いていた日記によっても、記念されることになる。ある歴史家は、この日記について、戦争によるホロコーストの時代を証言する精神を照らすという重要性において、アンネ・フランクの日記に匹敵するものであると信じている。

鍛冶屋の娘だったヴォートリンは、一九三七年当時五一歳だった。イリノイ州の小さな農村セコアで育った彼女は、六歳で母親が死んだときに、隣人の家に預けられた。その家で彼女は、しばしば召使いや作業婦に毛の生えた程度の扱いを受け、厳冬の季節に家畜たちの番をしていたという。少女時代の貧困にもかかわらず、彼女は進学の道を歩むことができ、一九一二年にはアーバーナ・シャンペーンのイリノイ大学を優等で卒業した。若い頃の彼女は、背が高く、容貌の優れた、黒い長髪の、陽気で気取らない女性で、多数の求婚者の心を奪った。しかし、イリノイの大学を卒業する前に彼女は結婚をしないことを心に決めた。その代わりに、彼女は連合キリスト教宣教伝道団に参加し、中国安徽省の合肥市に移り、そこで女子中学校の校長を七年間務め、中国語会話を学んだ。次いで、ヴォートリンは南京に移

り、大虐殺当時の職に就いたのである。

南京でのヴォートリンは間違ひなく非常に幸せだった。イリノイの故郷を訪れたとき、彼女は、いつまでも中国のことを話し続けた。その文化、人々、そして歴史。家族には蚕の繭を贈り、中国の食材の料理法と食べ方を教えた。日記の中で、彼女は南京の景観の美しさをとめどなく賛嘆し続けた。熱心な園芸家だった彼女は、金陵学院に薔薇や菊を植えた。中山陵の温室を訪れ、明陵の付近の芳しい桃李の並木道を散歩した。

一九三七年の夏、友人たちといっしょに青島の海岸沿いの行楽地で休暇を過ごしていたときに、ヴォートリンは、北京から南数マイルの地域の日本兵が姿を消したという話を聞いた。姿を消したことが引き金となり、その地域における中国軍と日本軍の間の戦闘が発生した。この状況に駆り立てられるように、彼女の友人の一人は、暗い表情で、一九一四年のサラエボでのたつた二人の人間の暗殺が、結果的に、一〇〇万人以上の人々の死を引き起こしたのだと評した。

それでもヴォートリンは、南京から去っていく他のアメリカ人たちに加わることを拒否した。そこで、アメリカ大使館は彼女に、九フィートのアメリカ国旗を貸与した。それは、金陵学院の芝生の中庭の中央に広げて、日本軍の飛行士からキャンパスを護るためのものであった。さらに、大使館職員は彼女と他の国際委員会のメンバーに縄梯子を結ぶための長い縄を与えて、大使館員が乗船するパネー号が出航し、中国軍が城門を閉じたら、脱出する唯一の望みは城壁を乗り越えることだと言った。

しかし、ヴォートリンは一瞬たりとも脱出のことなど考えなかった。ほとんどの職員が南京を去ったために（多くは家を放棄して、上海や成都のような都市に逃げていった）、今ではヴォートリンは学院長

の代理として行動していた。彼女はキャンパスに女性の難民を受け入れる準備と、負傷兵をその地区から撤退させることのために労力を費やした。兵士たちの身分を隠すために、彼らの軍人証と軍服を学院の焼却炉で焼いた。彼女の指揮の下、家具は屋根裏部屋に移され、金庫は空にされ学生寮は清掃され、貴重品は油紙に包んで隠された。同時に、南京安全区のポスター、標識、腕章が作られ、ポランティアに配られた。ヴォートリンは二つ目のアメリカ国旗の縫製も指示した。これは二七フィートの長さだったが布を縫い合わせた中国人の仕立て屋が間違つて、星のある青い部分を左上ではなく左下の角に縫いつけてしまった。一二月の第二週の前に、金陵学院の門は女性と子どものために開放された。数千人の人々がなだれ込むように入ってきた。難民たちは一日に千人の割合で市内を通り抜けてやってきた。疲れきり、混乱して、空腹だった彼らの多くは、衣服だけを背負つて安全区のキャンプに入ってきた。「今日は昼食の時間を除いて朝八時三〇分から夕方六時まで、続々と難民が入ってくる間ずっと正門に立っていた」。彼女は書いた。「多くの女性は怯えた表情をしていた。城内では昨夜は恐ろしい一夜で、大勢の若い女性が日本兵に連れ去られた」。

ヴォートリンは女性たちと子どもたちが自由に入ることを許したが、若い女性の場所を確保するために、年配の女性は家に残ってほしいと頼んだ。だが、彼女の希望を実行する女性は少なく、ほとんどは芝生の上に座らせてもらうだけでいいからと懇願した。一二月一五日の夜には、金陵学院のキャンパスの人口は三千人以上になった。

翌日、日本兵が学院に襲いかかってきた。一二月一六日の午前一〇時に、一〇〇人以上の日本兵が、隠れている中国兵を探すために建物内を検査するといつて、金陵学院のキャンパスに乱入してきた。彼

らはすべてのドアを開くよう要求し、すぐに鍵を持ってこない場合には、斧を持って立っている日本兵がドアを破壊してこじ開けると言った。ヴォートリンは地理科準備室の二階に保管している数百の衣類が見つけれないかと案じて心を乱したが、幸運なことに、日本兵の注意は二〇〇人の中国人女性と子どもたちで一杯になっていた屋根裏部屋のほうに引き付けられていたために、衣類に注意が向くことはなかった（あとでヴォートリンは日本人から隠すために衣類を埋めた）。

その日、日本人はキャンパス内の作業夫を二度襲撃し、連れ去ろうとした。ヴォートリンが助けに入り、「兵士じゃない、苦力」と叫ばなかったら、彼らは間違いなく殺されていただろう。日本人が六機以上の機関銃をキャンパスに向けていて、多数の兵士たちで外側を固めて、逃走しようとするものは誰でも撃ち殺そうと準備万端だったということをヴォートリンが知ったのは、あとになってからだだった。

その晩、ヴォートリンは運び去られる女性たちを見、彼女らの絶望的な嘆願の声を聞いた。一台のトラックに八人から一〇人の少女が積まれて走っていき、それが通るたびに彼女らの叫び声が聞こえた。

「救命！ 救命！^{チイウミン}（殺さないで！）」

翌日の一九三七年一月一七日はさらにひどくなった。日本兵が市内に溢れると、金陵学院への女性たちの移動は激しくなるばかりだった。「なんとという痛ましい光景なの！」ヴォートリンは書いた。「疲れ果てた女性たち。怯えきっている少女たち。子どもたちを連れて、寝具と衣服の小さな荷物を持って、とぼとぼと歩いてくる」。入ってくる難民一人一人の話について書き取る時間がある人がいればいいのに。彼女は思った。特に、顔を黒く塗り、髪を切っている少女たちの話を。「きつい目付きの女性たち」の流れを收容するときに、彼女は日本人が、一二歳から六〇歳までの女性を強姦し、妊娠している女性

を銃剣で脅して強姦した話を聞いた。その日ヴォートリンは、難民のための食料を確保するために一日中走り回り、中国人の男性を安全区内の他のキャンプに移るよう指示し、キャンパス内で日本兵を見かけたという場所に向かって急行した。

しかし、その晩にヴォートリンを待っていた出来事に対しては、何の準備もしていなかった。二人の日本兵が中央校舎のドアをこじあげようとして、ヴォートリンにそこをすぐに開くよう要求した。彼女が鍵を持っていないし、中に兵士など隠れていないと言うと、日本兵は彼女の頬を平手打ちにして、彼女の隣にいた中国人男性を殴りつけた。次に、日本兵は学院から三人の作業夫を縛って連れて行った。彼女が彼らを正門まで追いかけていくと、日本兵が多数の中国人を道の脇に跪かせていた。日本人は学院の責任者と話をすることを要求し、それがヴォートリンだと知ると、跪かされている人たち全員を確認するよう命令した。仲間の一人の男が彼女を助けるために声を張り上げると、そのために彼は手ひどく叩かれた。

この騒ぎの最中に、委員会の三人のメンバーが駆けつけてきた。YMCA書記のジョージ・フィッチ、南京大学社会学教授ルイス・スマイス、長老派教会の宣教師W・プラマー・ミルズの三人である。兵士たちは彼らを一列に並ばせ、拳銃をもっていかどうか身体検査した。突然、彼らは叫び声と泣き声を聞き、日本兵が女性たちを通用門から引き摺り出していくのを見た。このときになって初めて、ヴォートリンは、尋問全体が外国人たちを正門に引きとめておき、その間に別の日本兵がキャンパス内で強姦する女性たちを捜索するための計略だったことを知った。「あの光景はけっして忘れることはできない」。そのとき憤激とやりきれなさを思い出して、彼女は書いている。「人々が道の脇に跪き、メアリーと程先

生と私が立っていた。枯葉がかさかさ音を立て、うめき声のような風の音、連れ去られていく女性たちの叫び声」。

その後の数ヶ月間、ヴォートリンは自分が一人だけで、金陵学院の難民キャンプを護っていることに気づくことがたびたびだった。日本兵たちは絶え間なく難民たちを苦しめ、処刑するための男性たち、あるいは軍事売春宿用の女性たちを連れ去ろうとした。ときには、彼らの徴収のやり方は厚かましいものだった。日本兵たちがキャンパスにトラックを運転して押しかけ、少女を要求するということが少なくとも一度はあった。しかし、ほとんどの場合には、強姦目的の女性拉致は密かに行われた。夜になつてから、兵士たちは竹の塀を飛び越え、あるいは通用門や裏門をこじ開けて、暗闇の中で手当たり次第に女性を漁った。人々の間に、この人狩りの探検は知れ渡り、「くじ引き」と呼ばれた。

一九三八年の元旦の日に、ヴォートリンは兵士によつて図書館の北側の竹林に連れこまれた少女を救った。こういう英雄主義的な行為は、しばしばヴォートリンの命を危うくするものだった。ほとんどの兵士たちは、彼女に対して「獐猛で常軌を逸して」いて、真新しい血痕が染みついた銃剣を振り回した。「ある場合には彼らは傲慢で、私を刃のような視線で睨みつけた。ある場合には、その手に刃を握っていた」。あるとき、彼女が日本兵の略奪を止めようとする、一人が彼女に拳銃を向けた。

ヴォートリンもときには、日本兵の扱いで誤りを犯すことがあった。ラーベや他の委員会のメンバーが日本人に騙されて、男たちを渡してしまい、処刑されたように、ヴォートリンも騙されて、無垢の女性たちを日本兵の手中に送りこんでしまったようである。一二月二四日、ヴォートリンは事務所に呼び

出され、日本軍高官と年配の中国人通訳に会った。彼らはヴォートリンと、日本軍における売春婦の必要性について議論した。「彼らの要求は、私たちのキャンプの一万人の難民から売春婦の女性を選び出すことを許可してもらいたいというものだった」。後にヴォートリンは、その会合について日記に書いている。「彼らは一〇〇人ほしいと言った。彼らは、正規の許可を得た場所が始まれば、無垢の身持ちのよい女性たちを苦しめることはなくなると思う、と言う」。

非常に奇妙なことだが、ヴォートリンはこの要求を許可した。恐らく、彼女にはそのことについて別の選択肢がなかったのだろう。あるいは、日本人が売春婦たちを連れて軍事売春宿に去っていけば、彼らは難民キャンプの処女たちや立派な既婚の婦人たちを苦しめることをやめると本当に信じたのかもしれない。彼女の決定の背後にどのような理由があったにせよ、ヴォートリンが圧力の下でこれを行ったと考えることはないだろう。彼女は日本人が搜索するのを待っていた。長い時間の後、彼らは最終的に二人の女性を確保した。日本人がこれらの女性をどうやって売春婦であると見分けたかについて、ヴォートリンは語っていない。しかし彼女は、日本人はもつと多数の売春婦が安全区に隠れていると確信しているので、満足していなかったと述べている。「少女たちが次から次にやってきて、彼らは残りの七九人を身持ちのよい少女から選ぶのではないかと尋ねた。私には、私の目の黒いうちはそんなことはさせないと答えるのがやっとだった」。こう、彼女は書いている。

市の陥落から一週間後に、日本人は地域の活動を統制しようとする系統的な措置を取り始めた。日本軍の憲兵司令官は、一二月二四日発効の布告を出し、すべての市民が日本軍の事務所が発行するパスポー

ト（「良民証」とも呼ばれた）を取得しよう命令した。パスポートを代理で受け取ることは許されず、パスポートを持たない人は南京城内で生きることが許されない。軍は、登録しなければ処刑される危険があることを通知する掲示を街路に貼り出した。

二月二八日、男性の登録が始まった。金陵学院で彼らは四列に並んで登録用紙のコピーを受け取り、キャンパスの北西の角に進んで行った。そこで、日本人は彼らの名前、年齢および職業を記録した。ヴォートリンは、登録にやってきた男性たちのほとんどが老人か障害者であることに気づいた。すでにほとんどの若い男性たちは市から逃亡していたか、殺されていたのである。顔を見せに来た中でも、多くの男たちが元兵士と疑われて連れ去られ、後に残されたのは安全区の指導者の前で涙を流し、跪き、彼らの夫や息子たちの解放を請合ってくれるよう懇願する老人や女性だった。これに対する安全区の指導者たちの交渉はいくつかの例では成功したが、彼らは日本軍の将校たちが指導者たちによる介入に対して次第に苛立ちを隠さなくなっているのに気づいた。

男性を登録に駆り立てようとして、その結果に失望した日本人たちは、人々を脅迫して服従させようとした。二月三〇日に、彼らは翌日の午後二時までに登録していないものは全員射殺されると通告した。この出来事について、一人の宣教師が書いた。「これははったりに違いない。しかし、それは人々を震え上がらせた」。翌朝、従順にも、巨大な群集が登録地区に現われた。その多くは、登録する列に確実に並べるようにと、午前三時に起床してきた。日本人の苛酷な威嚇は大きな恐怖を植えつけたために、当局は一月一四日までに少なくとも一六万人の人々の登録に成功した。

女性の登録は二月三一日の午前九時に始まり、数千人の中国人女性が金陵学院の中央校舎の前に集

まり、そこで日本軍将校が彼女たちに講義をしていた。演説は最初日本語で話され、次に通訳によって中国語に翻訳された。ヴォートリンは彼の演説を覚えていた。「君たちは伝統的な結婚の習慣に従わなければならない。君たちは英語を学んではいけないし、劇場に行つても行けない。中国と日本はひとつでなければならない」。そして女性たちは二列に並んで定められた枠の間を通つて行進して米を販売する場所に進みそこで券を与えられた。ヴォートリンは、日本兵が女性たちを家畜のように駆りたてていることにたいそう喜んでゐる姿を観察していた。ときに、彼らは女性の頬にゴム印を押した。日本兵は女性たちに、日本の新聞記者や写真家に向かつて微笑み、幸せそうにするようにと強いた。しかし、実際には登録のことを考えるだけで、文字通り恐怖のあまり寝込んでしまう女性たちもいるほどだったのである。

ときにヴォートリンには、日本人による中国女性の登録は、強姦する最も魅力的な女性を求めた大がかりな視察以外の何物でもないのではないかと思えた。女子登録のまさに最初の日に、日本人は安全区の特定の女性たちに目をつけ、彼女らを連れ去ろうとした。彼らは二〇人の女性を選別した。売春宿で使おうとしていたことに疑問の余地はない。彼女たちは髪をカールさせていたか、服装が良すぎたのである。しかし、全員が解放された。後にヴォートリンは書いている。「母親や他の人が彼らの保証人になったからだつた」。

登録が終わると、日本人は安全区自体を排除しようとした。しばらくして、日本人は、月末までに全員がキャンプから出て自分の家に戻ることを要求する通告を出した。二月四日が最終期限とされた。最終期限を過ぎたとき、日本兵が金陵学院を視察し、残っている少女たちと女性たちに立ち去るよう命令

した。ヴォートリンが視察官に、彼女らは他の市から来たか、あるいは家が焼かれてしまったので、立ち去ることはできないと言うと、日本人は憲兵が責任を持つて彼女らを保護すると主張した。ヴォートリンは彼らの約束を信じかねていた。日本人の意向を伝えるために日本人と一緒に来た中国人通訳さえ、若い女性は安全でないから、現在、彼女らがいるところを離れないほうが良いと囁く始末だった。

難民たちの度を越えた人数の多さは、ヴォートリンを圧倒した。何百人もの女性たちがベランダにすし詰めになり、足の踏み場もなかった。さらに多数の女性たちが夜に野外の草の上で眠っていた。金陵科学講堂の屋根裏部屋には二千人以上の女性たちが住んでいた。ヴォートリンの友人はこれらの女性たちについて書いている。「冷たい冬の月に、何週間もセメントの上で肩を寄せ合つて眠った。建物のセメントの階段の一段一段が一人分の家だった。これらの階段は四フィート（約一二〇センチメートル——訳者）よりも長いものではなかった。化学研究所のテーブルの上に休息所を得ることができたものは幸せだった。送水管やその他の付属設備は全く気にならなかった」。

南京大虐殺はヴォートリンの健康を破壊していったが、彼女が毎日耐え続けた精神的な苦痛は肉体の消耗よりも遙かに彼女を害するものだった。彼女は日記に書いた。「神様、今夜は南京での日本兵による野獣のような残忍行為を制止してください。日本の女性たちがこのような戦慄の物語を知ったら、どんなに恥じるでしょうか」。

それほどの圧迫感の下でも、ヴォートリンが他人を慰めその愛国心の感情を保たせようとする気力を

失わなかったのは特筆すべきことである。あるとき、金陵学院の赤十字の台所に老婦人が来て粥を探していたとき、彼女は粥がもう残っていないことに気づいた。ヴォートリンはすぐに自分が食べていた粥を彼女にあげてから言った。「あなた方は悩むことはありません。日本は失敗します。中国は滅びません」。また、ある少年が身を護るために日本の国章である旭日の腕章をつけているのを見たときに、ヴォートリンは彼を叱りつけて言った。「あなたはそんな旭日の紋章を身につける必要はありません。あなたは中国人で、あなたの国は滅びていないのです。あなたはこんなものを身につけた日付を覚えておくべきで、決して忘れてはいけません」。ヴォートリンは、繰り返し、繰り返し、キャンパスの中国人難民に対して、未来に対する信念を失つてはいけぬのだと力説した。「中国は滅びていません」。彼女は言った。「中国はけっして滅びません。日本は必ず最後には敗れます」。

他の人々は、苦しい状況の中で彼女がどれほど献身的に働いていたのかを見ていた。ある中国人の生存者は思い出した。「彼女は朝から夜まで眠っていませんでした。彼女は見張りをつづけていて、日本兵がきたときには……彼らを押し返すための最大の努力をし、彼らの上官のところに行つて、中国人の女性や子どもに酷いことをしないよう嘆願しました」「あるときは、乱暴な日本兵によつて彼女が何度も殴られたと聞きました」。別の人が、自分の南京大虐殺の目撃記録に書いている。「みなが彼女のことを心配し、みなが彼女を慰めようとはしました。それでも彼女は、強い勇気と決意をもつて、始めから終わりまで、中国人の女性を護るために戦つたのです」。

安全区を管理する作業は肉体的な負担だけでなく、心理的な消耗をも強いものだった。ナチ黨員で

国際委員会のメンバーのクリスチャン・クレীগーは、街路であまりに多くの死体を見たので、その悪夢にうなされるようになった。それでも、信じられないような悪環境の下で、委員会は多数の生命を救った。次に記すような、驚くべきような事実がある。

——略奪と放火により食物がほとんどなくなつたために、中国人難民は金陵学院に自生するエゾギクやセイタカアワダチソウなどの野草を食べ、市内で見つけたキノコを食べて生きていた。安全区の指導者でさえも十分な食事をとることができず空腹だつた。彼らは炊き出しで無料の米の食事を配給しただけでなく、その一部は難民の住居に直接配送した。安全区内の多くの中国人は、怯えきつていて、建物の外に出ることもできなかつたのである。

——上品な読書家たち。安全区の指導者の多くは、強姦者、殺人者、あるいは街路での略奪者の群れに対処した経験がなかつた。ところが、彼らは市内の中国人警察に対してさえ、その警護者として行動した。彼らはあたかも戦士のように、体力を振り絞り蛮勇を掻き立てて危険な場所に飛び込んでいった。あるときは処刑場で格闘して中国人を逃がし、あるときは女性の上にかぶさる日本兵を叩いて引き剥がし、あるいは、日本軍が構えている大砲や機関銃の銃口の前に飛び出して、発砲を防いだことさえあった。

——活動の過程で、安全区の指導者の多くは射殺されそうになつたし、日本兵が振り回す銃剣や日本刀で一撃されたものもいた。たとえば、南京大学の農業工学教授チャールズ・リッグズは、日本人将校が中国人の民間人を兵士だと誤認して連行しようとするのを阻止しようとして殴打された。激昂した日本軍将校は「彼の日本刀で三度にわたりリッグズを脅したが、最後には拳で彼の胸を強打した」。日本兵がマイナー・シール・ベイツを拳銃で脅したこともあった。別の事件では、三人の少女が寝ていたベツ

ドにもぐりこもうとした兵士をロバート・ウィルソンが病院から叩き出そうとしたときに、兵士は彼に向けて拳銃を構えた。別の兵士はジェイムズ・マツカラムとC・S・トリマーに向けて小銃を発砲したが、弾は当たらなかつた。兵士によって縛られ連れ去られた大学附属中学の生徒の状態を知るために、マイナー・シール・ベイツが日本軍の憲兵隊本部を訪れたときには、日本兵は階段の上から彼を突き落とした。ときには、護符としてのナチのハーケンクロイツですら襲撃を防ぐご利益がないこともあつた。一二月二二日にジョン・ラーベは書いている。クリスチャン・クレীগーとハッツというもう一人のドイツ人が、酔つ払つた日本兵によつて首を傷つけられた中国人を救おうとしたときに攻撃された。ハッツは椅子で身を護つたが、明らかにクレীগーは縛られ、殴られたようである。

——最終的に、安全区は二〇万人から三〇万人の難民を収容した。これは市内に残つていた中国人の半数近くになる。

後の南京大虐殺の研究を照合すると、最後にぞつとするような統計が得られる。南京の元の住民の半分は大虐殺の前に南京を離れた。南京にいた人々の約半数（市の陥落時にいた中国人の難民、以前からの居住者、および兵士の合計の六〇万から七〇万人のうちの三五万人）が殺された。

大虐殺の最悪の時期に、南京の人々の半数が安全区に逃げ込んでいたとするならば、残りの半分は、つまり安全区に避難しなかつた人のほぼ全員が、日本人の手によつて死んだのではないかということになる。